

「はじめまして！」

今年、桜の開花は少し早目でした。でもその後の寒さのお陰か、子どもたちを満開の桜が迎えてくれました。在園の子どもたち、新入の子どもたち、変わらない先生たち、新しい先生、そして新米の園長、「はじめまして！」の春がスタートしました。

初めての園だよりー、まずは「はじめまして！」と、気持ちも新たに自己紹介から始めたいと思います。(もう、いろいろご存じの方もたくさんいらっしゃいますが・・・)

1962年7月、東京で生まれました。田舎のない東京育ちです。保育園に通い、卒園する時には保育園の先生になると、すでに(!?)決めていました。キリスト教との出会いは、ミッションスクールで。中学、高校では音楽部、その後もずっと由歌という、その名の通り歌う事を楽しんできました(結構まじめに合唱やってました)。短大でキリスト教保育というものを学びました。「子どもが生まれたら、この考えに近い幼稚園に通わせたい。」またまたこの時すでに、娘たちの愛隣幼稚園入園が決まっていた(!?)・・・その後、ここに至るまで紆余曲折。決して一直線の平坦な道程ではありませんでした。が、3人の娘たちは、しっかり愛隣っ子。私も、その愛隣で6年前に再スタート。こうして考えてみると、私の夢は随分かなえられてきたわけです。不思議な思いがします。神様に感謝します。

13年前、半ば強引に必死の思いで、幕張本郷から娘2人と通園しました。一番幸せな幼児期を過ごして欲しいと願っての選択でした。在園中、どの娘も行きたくないと、私を困らせるようなことはありませんでした。でも、幼い子どもですから、卒業するからといって、親が抱くような特別の感慨があったわけでもありませんでした。その時にはあまり見えてきませんでした。<一番幸せな幼児期>であったかどうかということは。

卒業後、彼女達はたくさんの愛隣出身でない人たちに出会いました。そして、自分たちが当たり前と思い生活していた日々が、実は、ひどく貴重な日々であったことに気がきます。「ねーねー母さん、今日、友達と話しててびっくりしたんだよね。幼稚園であんまり遊んだことないんだってさぁ～。私が、幼稚園ですーっと遊んでた、って言ったらみんな羨ましがってたよ。」そして、3人の愛隣自慢話は延々と続きます。またある時は末っ子が、「今日から朝は、Tちゃん(障害のある友達です)迎えに行くから。」「ふーん、ちょっと遠回りだね。どうしたの?」「一緒に行ったほうがTちゃんも楽しいでしょ。それに、心配じゃないし。」これにもまた姉たちが話に加わり、「それいいよね。ちょっと手伝ってあげるだけで困らない事もあるよね。でもさ、そういう風に考えられない人もいてさ、悲しくなるときある。」障害をもった友達も、彼女達には当たり前での存在でした。娘たちはごく普通の高校生と小学生です。毎日の親子げんかは、とてもお見せできるようなものではありません。でも、この愛隣で幸せな幼児期を送り、大切な根っこを育てられたことは確かなことのように。

「はじめまして」の春です。また、たくさんの出会いが生まれます。この出会いで始まる毎日が、満たされた幸せな時であるように。『あなたはあなたのままでいい』と自分自身にも、仲間に対しても思えるように。目には見えない根っこを大切に育てていきたいと思います。そして、この子ども達の成長に取り残されないように、大人たちも育ちあいたいと思います。何年後かに、見せてくれる姿や言葉に、今過ごす日々の答えが出されるとするなら、心してその根っこを育てなければと、思いも新たなスタートです。